

国文学研究者の生産性と発表メディア  
Publication and Scholarly Productivity in the  
Field of Japanese Literature

倉田敬子  
*Keiko Kurata*

真弓育子  
*Ikuko Mayumi*

*Résumé*

The purpose of this paper is to clarify the relation between the scholarly productivity and types of publications (books and articles). About 200 researchers of Japanese Literature, their publication records and seven factors (age, prestige of graduate school, kind of degree, institutional affiliation, position at the institution, “productivity level of another publication type”, and “the mean number of authors per book”) are examined.

Main findings are as follows:

- (1) In books, groups who have a high level of productivity are researchers who; a) are in their sixties, b) graduated from Tokyo University, c) hold a doctorate in literature, d) belong to national universities which hold the doctoral course, e) are professors, f) have more than 10 articles and g) have a “mean number of authors per book” of 21.

In articles, groups who have a high level of productivity are researchers who; a) are in forties, b) graduated from Tokyo Univ. and universities which are famous for Japanese Literature, c) hold a doctorate in literature, d) belong to national universities which hold the doctoral course, e) are associate professors and f) have more than 6 books published.

- (2) As a result of the Quantification Theory I with these factors, “mean number of authors per book” have the most influence on book productivity. But any factors do not have much influence on article productivity.

I. 研究者の生産性と発表メディア

A. 目的

倉田敬子：慶應義塾大学大学院文学研究科図書館・情報学専攻博士課程，東京都港区三田 2-15-45

Keiko Kurata: Graduate School of Library and Information Science, Keio University, 2-15-45, Mita, Minato-ku, Tokyo.

真弓育子：慶應義塾大学大学院文学研究科図書館・情報学専攻博士課程，東京都港区三田 2-15-45

Ikuko Mayumi: Graduate School of Library and Information Science, Keio University, 2-15-45, Mita, Minato-ku, Tokyo.

## 国文学研究者の生産性と発表メディア

### B. 研究者の生産性と発表メディアの関連

## II. 国文学研究者の生産性

### A. 調査目的

### B. 調査方法

### C. 調査結果

## III. 国文学研究者の生産性と発表メディア

### A. 国文学研究者の生産性にみられる特徴

### B. 国文学研究者の生産性と発表メディアとの関連

## I. 研究者の生産性と発表メディア

### A. 目的

学術情報の生産過程を研究者の生産性の観点からみていくにあたって、研究者の生産性に影響する変数は今まで数多く考えられてきた。しかし、研究成果発表の場としてのメディアについては、あまり考慮されてこなかった。これは一つには、研究者の生産性をはじめとして、学術情報の流れに関する研究が自然科学分野を中心に進められてきたこととも関係していると考えられる。というのは、自然科学分野においては、研究成果発表の場としてのメディアといえば、レフェリー制を持つ学術雑誌（特に学会誌）しか考えられてこなかったため、発表メディアによる生産性の違いという観点はあまり注目されてこなかったといえる。これに対して、社会科学や人文科学の分野においては、雑誌論文だけでなく図書という形での発表も重要なものと考えられる。さらに、雑誌論文と言っても、特に日本の場合、レフェリー制を持つ学会誌が論文を発表する中心的なメディアであるかどうかは明らかでない。図書や雑誌論文などという発表する場としてのメディアの違いや、雑誌論文を掲載する雑誌の種類といった研究成果発表のシステムの特徴（構造）というものが、研究者の生産性に関連しているのではないかと考えられる。筆者らの一人が以前に政治学者の生産性を調査した際に、特定大学出身の研究者や特定大学に所属している研究者が高い生産性を示したが、同時にそのような生産性の高い特定大学出身者の場合、図書を出している出版社の種類や雑誌論文を発表している雑誌の種類が、研究者全体の傾向とは異なるパターンを示していることを見いだした<sup>1)</sup>。たとえば、政治学分野においては雑誌論文を掲載する雑誌の種類として、紀要や一般商業誌といった性質の異なる雑誌が発表の場として存在

しており、研究者全体としては紀要を中心に発表しているのに対して、一般商業誌に発表しているのは東大出身者に集中している。そして、この東大出身者の雑誌論文の生産性が非常に高くなっていった。これは、日本の政治学研究分野における研究成果発表のシステムが、研究者の生産性に影響している一つの表れと考えられる。

そこで本論文では、国文学研究者の場合を取り上げ、国文学分野における研究成果発表の場としてどのようなメディアが使われ、どのような特徴を持っているのかを把握したい。そのうえで、研究者の生産性に発表メディアというものがどのような形で、どの程度関連するのかについて、従来考えられてきた研究者の属性に関わる変数とも絡めて考えていきたい。対象として、国文学研究分野を取り上げたのは、この分野の研究者がその発表活動において図書と雑誌論文という異なる発表メディアを使い分けていることが既に筆者らの一人の調査によってわかっており<sup>2)</sup>、研究者の生産性と発表メディアの関連を考えるのに適した分野と考えたためである。

### B. 研究者の生産性と発表メディアの関連

#### 1. 過去の調査におけるメディアの扱い

今までの研究者の生産性に関する調査においては、雑誌論文数を生産性の単位とすることが多かった。ただしいくつかの調査においては、雑誌論文だけでなく図書も含めて調査している場合もある。たとえば、D. Crane や新堀等の場合、雑誌論文と図書の生産数両方について調査しているが、各々を別個に捉えるのではなく、両方の生産数を一定の重みづけに従って一つの点数（一種の業績点。たとえば学術的な論文が5点なら図書の著作を10点と数える）を与えている<sup>3)4)</sup>。この方法の場合、図書と雑誌論文というメディアによる違いは、調査を行う研究者がそれぞれ独自に考える点数の重みづけには反映されるが、発表メディアが異なることが研究者の生産性

に何らかの影響を与えることになるのかという観点は考えられていない。

また R. A. Wanner 等は、自然科学、社会科学、人文科学の3分野の研究者の生産性の比較を目的に調査を行っているが、その際図書の生産数と雑誌論文の生産数とを別個に数えている<sup>5)</sup>。しかし、生産性に影響する変数をかなり細かく数多く取り上げているため、どの変数が最も生産性に影響しているかとか、図書の場合と雑誌論文の場合でその影響の仕方何らかの違いがあるのかといった点については触れられていない。

## 2 発表メディア

今回、特に研究者の生産性と発表メディアとの関連に着目したいわけだが、今までこのような観点から研究者の生産性を考えた研究はなされてこなかっただけに、発表メディアと生産性の関連をどう捉えるかが問題になる。今までよく取り上げられてきた研究者の属性に関する変数、たとえば年令、出身校、所属機関のような変数の場合、ある研究者のある時の年令や所属機関は一つに決まる。それに対して、ある研究者の発表メディアはこうであると直接、一意に決めることは容易ではない。そこで、今回は発表メディアと研究者の生産性との関連を次の三つの観点から考えてみることにした。

(1) 図書と雑誌論文という発表メディアが異なることにより、各々の生産性に影響を与える変数が変わってくると考えられる。そこで、図書というメディアの生産性と雑誌というメディアの生産性に影響を与える変数とを比較することで、発表メディアの違いによる生産過程の違いを考察する。

(2) 以前の国文学研究分野の発表メディアに関する調査で、図書が多く書かれる時の研究者の年令と雑誌論文が多く書かれる時の研究者の年令とが全体としては異なるという結果を得たが、その一方で研究歴が長く、かなり多産な研究者を何人か取り上げてみた場合には、かなり若い時から図書を書き始め、図書を多く生産している時でも雑誌論文を書き続けているという傾向がみられた<sup>2)</sup>。そこで今回のようにある一時点において研究者の生産性をみた場合、国文学研究者全体の傾向としては、図書を多く生産する研究者はやはり雑誌論文も多く生産するのか、それとも図書を多く生産する研究者は同時期には雑誌論文はあまり書かないのか、または逆に雑誌論文を多く生産している研究者はあまり図書を書かないのかという、それぞれのメディアの生産の間どのような関連があるのかをみていく。

(3) 国文学研究分野においてではないが、以前の調査において、図書、雑誌論文という発表メディアの違いだけでなく、図書の出版社や雑誌論文の掲載誌の種類が生産性の高い研究者とそうでない研究者とで異なるという結果を得た<sup>1)</sup>。そこで、国文学研究分野においてもそのような特徴が見られかどうかに着目する。

本論文では、この発表メディアと生産性の関連を考える上で、今まで生産性に影響すると考えられてきた変数とも絡ませて考えていきたい。そこで今回は研究者の属性として、従来の生産性に関する研究でよく取り上げられており、研究者の個人的(生得的)属性や研究者としての教育過程、現在の研究環境をある程度代表していると考えられる次の5つの変数も併せて取り上げて、各変数と生産性の関係、そして研究者の生産過程を全体として考察していくことにする。

- (1) 年令
- (2) 出身校
- (3) 学位
- (4) 所属機関
- (5) 地位

## II. 国文学研究者の生産性

### A. 調査目的

今回の調査は大きくいって次の三つに分かれる。

(1) 国文学研究者の発表しているメディアの種類や一文献あたりの著者数などの基本的特徴を把握する。ここで、単に図書、雑誌論文という区別だけでなく、図書の出版社や論文の掲載誌が、研究者の属性によって異なるのかもみていく。I章B節で、発表メディアと生産性の関連を三つの観点から考えると述べたが、ここではそのための基礎的なデータを得るとともに、観点の三番目、つまり年令や所属機関といった研究者の属性が異なることにより、図書の出版社や雑誌論文の掲載誌の種類に違いがないかどうかの調査も行なう。

(2) 今回取り上げた5変数それぞれと図書の生産数、雑誌論文の生産数との関係を個別的にみる。その際、多数図書を生産する研究者が雑誌論文も多数生産するのか、あるいは逆に図書を多数生産する研究者は、少しの雑誌論文しか生産していないのかという点をみることで、発表メディアと生産性に関する二番目の観点についても調べる。

(3) (2)の調査で個別的に取り上げた変数をまとめて、

## 国文学研究者の生産性と発表メディア

図書の生産数と雑誌論文の生産数それぞれに影響を与える変数を検討する。これは、発表メディアと生産性に関する一番目の観点、つまり図書と雑誌論文という発表メディアの違いによって生産性に影響を与える変数がどのように異なるかをみるための調査に当たる。

### B. 調査方法

#### 1. 対象

調査対象としたのは、1981年度に日本の4年制大学および短期大学に所属する国文学研究者の中から無作為抽出した197名である。研究者の所属に関しては「大学職員録」1982年度版に依っている。次に、これら研究者が1981年から1983年までの間に発表している文献を、国文学研究資料館の刊行している「国文学年鑑」によって調べた。

#### 2. 項目

研究者の発表に関する基本的特徴としては、以下の項目について調査する。

- ・発表メディアの種類ごとの生産数  
今回は、図書、雑誌論文、新聞、その他に区分してカウントした。

さらに、図書と雑誌論文に関してのみ、

- ・執筆の性質  
ここでは図書、雑誌論文それぞれを次のようにグループ化した。

図書：著作／編纂／編集／巻末の目録など

雑誌論文：著作／書評／座談会

- ・著者数
- ・ページ数

の3項目に関して調べ、また図書に関しては、

- ・出版社の種類  
国文学専門主要出版社／大手一般出版社／その他の一般出版社／大学出版局などを、また雑誌の場合にはその掲載誌を調べた。

- ・雑誌の種類  
紀要／学会誌／国文学専門の一般商業誌／研究会誌およびその他の一般商業誌

また、研究者の属性として今回取り上げる5つの変数年齢、出身、学位、所属、地位、については、以下のようにより研究者のグループ化を行なった。

- ・年齢 40才未満／40～49才／50～59才／60～69才／70才以上
- ・出身 東大／京大／左記2グループ以外の国公立

大／早稲田・國學院大／その他の大学院のある私立大

／私立大（大学院無し）およびその他

- ・学位 博士／修士／学士およびその他

- ・所属 国立大（大学院有り）

／国立大（大学院無し）および公立大

／私立大（大学院有り）

／私立大（大学院無し）／短期大学

- ・地位 教授／助教授／講師および助手

### C. 調査結果

#### 1. 国文学研究者の生産性における基本的特徴

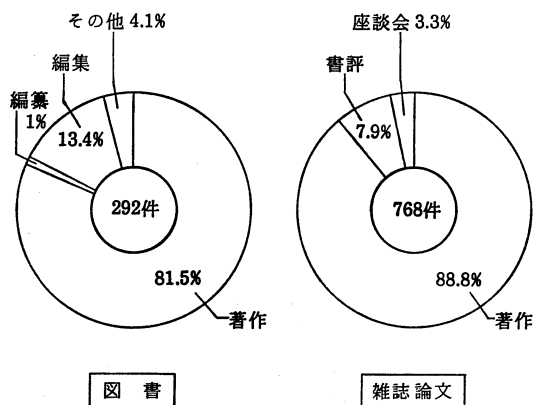
ここでは、国文学研究者の生産性にみられる基本的特徴を把握するため、発表メディアの種類、執筆の性質、一文献あたりの著者数および平均ページ数に関する結果について述べる。また、研究者の属性による図書の出版社、雑誌論文の掲載誌の種類の違いもみていく。

##### a. 発表メディア別の生産数

調査対象とした国文学研究者197人が、1981年～1983年の3年間に生産した文献数は図書が292件、雑誌論文が768件、新聞記事が30件、その他が12件であった。新聞記事の場合、全体の4割以上を一人の研究者が生産しているという特異なケースであり、その他に関しても3年間でわずか12件という少なさであるので、以降は図書と雑誌論文とに分析を限る。

##### b. 執筆の性質

図書と雑誌論文の生産数を、執筆の性質、つまり著作、編集、書評などの区別によってみたのが、第1図である。



第1図 執筆の性質ごとにみた図書と雑誌論文の生産数

図書、雑誌論文双方において、著作が全体の80%から90%を占めている。ただし、図書において、編集が10%以上を示している点は、雑誌論文にはない特徴と言えるだろう。しかし、全体としては図書、雑誌論文双方において著作が大部分を占めていることが明らかになったので、これ以降は図書と雑誌論文の著作を対象に、その結果を報告していく。

c. 一文献あたりの著者数および平均ページ数

図書と雑誌論文の著作に関してのみ、その著者数をみると、雑誌論文では97%までが単独著作で占められているが、図書では、単独著作の割合は全体の18%を占めるにすぎない。図書一冊あたりの著者数の平均は15.6人で、最高は58人にのぼり、かなり大勢での分担執筆がなされていることがわかる。

図書と雑誌論文の著作に関して、研究者一人あたり一文献の平均ページ数をみると、一文献あたりの平均ページ数は、雑誌論文では平均12.5ページに対して、図書では平均90.8ページであり、図書は分担執筆が多くなされてはいても、雑誌論文に比べれば、やはりそれなりの分量が執筆されていることがわかる。

d. 図書の出版社、雑誌論文の掲載誌にみられる特徴

まず、図書をその出版社の種類ごとにみると、その半分以上が「その他の一般出版社」から刊行されており、

「国文学専門の出版社」と「大手一般出版社」がそれぞれ20%近くを占めている。

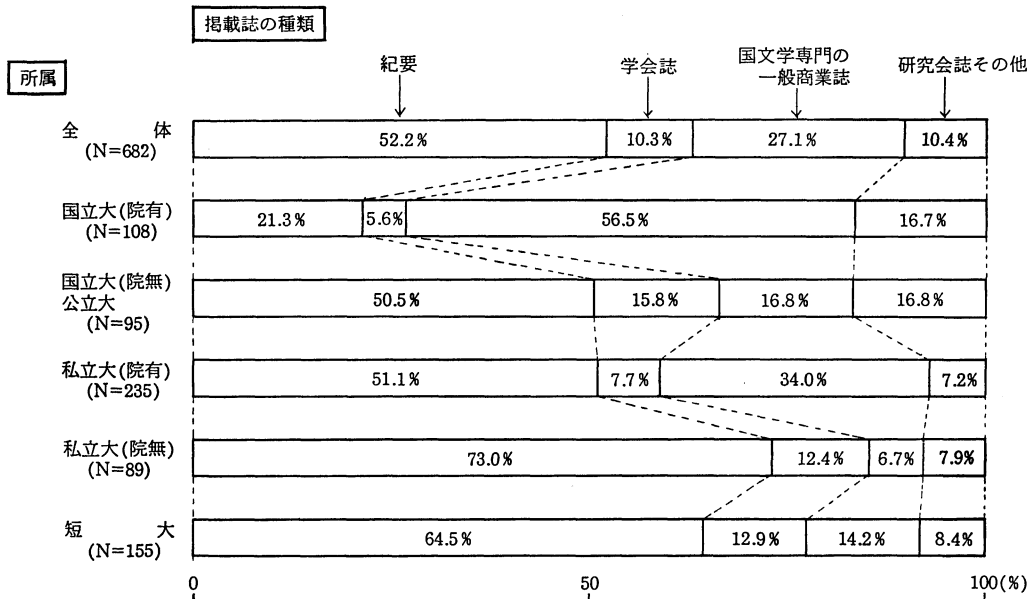
この出版社の種類別生産数をさらに研究者の属性である、年令、所属、地位、出身、学位ごとにかけてみても、何れの変数においても、特定のカテゴリーだけが全体と特に異なる傾向を示すことはなかった。

次に、雑誌論文をその掲載誌の種類別にみると、全体としては「紀要」が半分以上を占めており、その次に、「国文学専門の商業出版誌」が30%近くを占め、「学会誌」「研究会誌・一般誌」がそれぞれ約10%を占めている。

これを図書の場合と同様に、研究者に関する5つの変数ごとにみると、年令、地位、学位に関しては、全体とほぼ同じ傾向を示したが、所属と出身においては異なる傾向がみられた。

第2図が、雑誌論文の掲載誌の種類を所属別にみたものである。大学院のある国立大学に所属している研究者の場合のみ、他グループの研究者と異なっている。つまり、このカテゴリーの研究者が生産する雑誌論文のうち、約60%までが「国文学専門の一般商業誌」に発表されており、研究者全体でみたとき半分以上を占めていた「紀要」には約20%しか発表されていないことがわかる。

同様に、出身に関してみた場合、東大出身者の場合他



第2図 研究者の所属ごとにみた掲載誌種類別の論文生産数

## 国文学研究者の生産性と発表メディア

と異なり、生産している雑誌論文のうち半分以上が、「国文学専門の一般商業誌」に発表されていることがわかった。

### 2. 各変数ごとにみた平均生産数と発表メディア

ここでは、生産数を図書と雑誌論文とに分け、それぞれが研究者の属性や図書一冊あたりの平均分担執筆者数ごとにどのように変化しているかをみていく。

また、図書の生産数の高い研究者、もしくは生産性の低い研究者が雑誌論文をどの程度生産しているのか、逆に雑誌論文の生産性の高い研究者、もしくは生産性の低い研究者が図書をどの程度生産しているかをみる。

#### a. 研究者に関する変数ごとにみた図書と雑誌論文の生産数

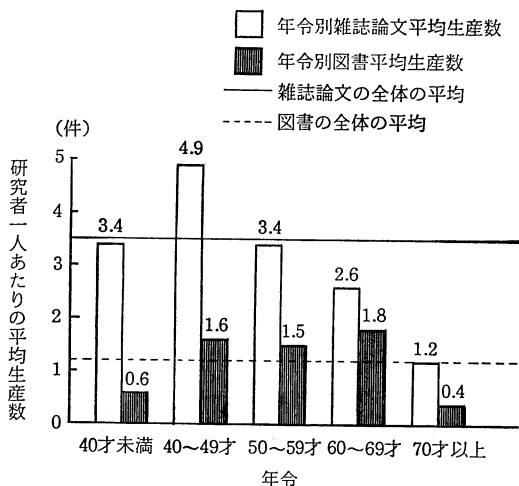
まず、研究者の生産数を発表メディア別にみると、研究者一人あたりの生産数は、図書が平均1.2件、雑誌論文が平均3.5件であった。最も高い生産性を示した研究者は、図書で最高12件、雑誌論文で最高32件を生産していた。

##### (1) 年令と生産性

年令と生産性との関連をみたのが、第3図である。雑誌論文の場合には、40才代の平均生産数が最も高く、このグループの研究者のみが全体の平均以上の生産数をあげており、その年代以降は生産数が段々減少している。逆に図書の場合では、40才未満から60才代まで増加傾向を示し、60才代が最も高い生産性を示している。

##### (2) 出身校、学位と生産性

出身校と生産性との関連をみると、図書では東大出身



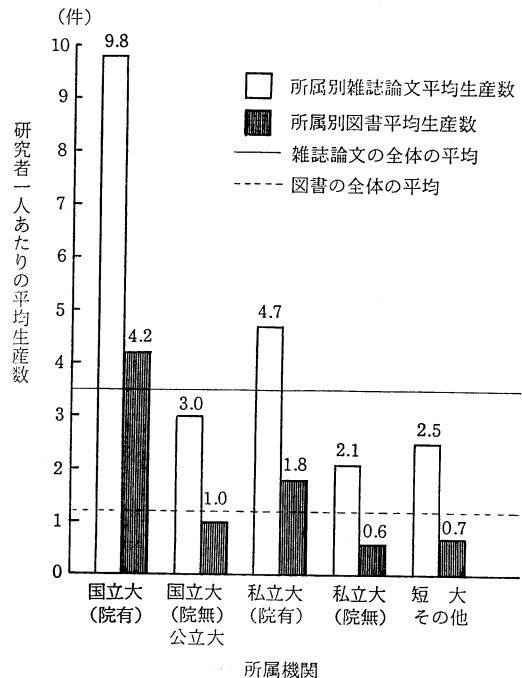
第3図 年令別研究者一人あたりの平均生産数

の研究者が平均生産数1.9件と最も高い生産性を示したが、早稲田・國學院大で1.6件、京大で1.2件、その他の国公立大学出身者で1.1件と東大出身者だけが飛び抜けて高い値を示しているわけではない。また大学院のある私立大学とその他ではそれぞれ0.8件、0.5件と全体の平均以下であった。一方雑誌論文では、東大、早稲田・國學院大出身者がともに4.2件と最も高い生産性を示し、その他の大学院のある私大が3.9件と続いている。その他の国公立大学、京大、その他の出身者はそれぞれ3.0、1.9、2.7件と全体の平均以下であった。

次に学位と生産性との関連をみると、博士号を取得した研究者の平均生産数は図書で1.7件、雑誌論文で5.3件であった。修士号の場合では、図書が1.1件、雑誌論文が3.7件、学士号の場合では図書が1.3件、雑誌論文が2.7件であった。雑誌論文では高い学位をもつ研究者の方が高い生産性を示しているが、図書の場合では、学士号取得者より修士号取得者のほうが低い生産性を示した。図書、雑誌論文どちらの場合でも、学位によってそれほど生産性に差はみられなかった。

##### (3) 所属機関、学位と生産性

所属機関においては、図書も雑誌論文とともに、大学院のある国立大に所属している研究者が最も高い生産性



第4図 所属機関別研究者一人あたりの平均生産数

を示し、雑誌論文では平均 9.8 件、図書では平均 4.2 件を生産している。次いで大学院のある私立大が高い生産性を示し、逆にその他の機関に所属している研究者の生産性が低いことがわかった（第 4 図参照）。

地位と生産性の関連をみると、図書では教授の地位にある研究者が平均 1.5 件、助教授が 1.0 件、講師が 0.6 件であり、高い地位にある研究者が高い生産性を示した。しかし、雑誌論文では教授が 3.0 件、助教授が 4.2 件、講師が 3.3 件と、助教授がもっとも高い生産性を示した。

b. 分担執筆と生産性

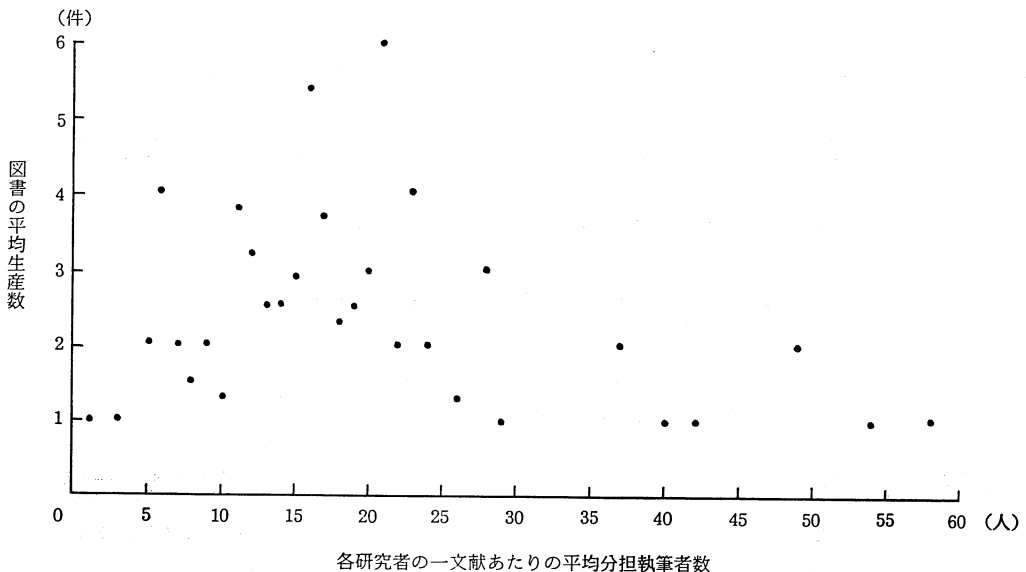
前節の研究者の生産性における基本的特徴で明らかになったように、図書の生産はかなり多くの人数による分担執筆が数多くなされていた。そこで、研究者が図書を生産する際に、どの程度分担執筆に関わっているかによって図書の生産性に違いがあるかどうかについて検討する。その際、各研究者ごとに一文献あたりの平均分担執筆者数を計算し、それと各研究者の図書生産数とを比較した。なお、雑誌論文はほとんど全て（全雑誌論文の 97% まで）が単独の研究者による生産であるので、各研究者ごとに、一文献あたりの平均執筆者数を計算してもほぼ全員が 1 となり、差がでないため、今回雑誌論文における平均執筆者数と生産性との関係については検討していない。

第 5 図は、横軸に研究者ごとの一文献あたりの平均分

担執筆者数を計算した結果をおき、縦軸には、横軸の平均分担執筆者数にあたる研究者をまとめ、そのグループの研究者における平均生産数をおいたものである。つまり、横軸は平均して一文献あたり何人で生産しているかを示し、縦軸は横軸で示されたような分担執筆の度合いを持つ研究者が平均して一研究者あたり何文献を生産しているかを示す。たとえば、ある一人の研究者が生産した文献を全て集め、一文献あたりの分担執筆者の数を計算してそれが平均 5 人であれば横軸の 5 の値を選ぶ。つぎに平均分担執筆者数が 5 人である研究者を集め、各研究者の生産数を平均して 2 件であれば縦軸の 2 の値を選ぶ。従って、数多くの研究者と共同で生産する傾向のある研究者グループが平均して多数の文献を生産するならば、グラフの右上に位置し、単独、もしくは少人数で生産する傾向のある研究者グループが平均して多数の文献を生産しているならばグラフの左上に位置することとなる。

実際の結果では、平均分担執筆者数が 20 人前後の場合に最も高い平均生産数を示している。また、平均分担執筆者数が 1 人から 25 人以下の部分においては、平均分担執筆者数が増えるにつれ平均生産数も増加している傾向がみられる。しかし、平均 30 人以上の場合は、平均生産数が 1 件か 2 件と少なくなっていることがわかる。

以上のように、分担執筆する場合の共著者数が多くな



第 5 図 図書の分担執筆者数と平均生産数との関連

国文学研究者の生産性と発表メディア

れば多くなるほど、(分担執筆ではあるが)多数の図書を生産しており、分担執筆者数が少なくなればなるほど少数の図書しか生産していないという傾向が明らかになった。つまり、単独で図書を生産する場合は、非常に珍しくなっており、むしろ多くの執筆者と共に図書を分担執筆する機会を持っていることが、図書を生産するための環境に恵まれていることと何等かの関係があると考えられよう。

c. 図書生産数からみた研究者グループと雑誌論文生産数からみた研究者グループとの関連

ここでは、図書と雑誌論文の生産数によって研究者を以下のようにそれぞれ4つのグループに分け、図書の生産数の高いあるいは低い研究者が雑誌論文をどの程度生産しているのか、逆に雑誌論文の生産性の高いあるいは低い研究者が図書をどの程度生産しているのかについてみる。

<図書生産数による研究者のグループ分け>

- A—図書を6冊以上生産している研究者(13人)
- B—図書を3～5冊生産している研究者(15人)
- C—図書を1～2冊生産している研究者(62人)
- D—全く図書を生産していない研究者(107人)

<雑誌論文生産数による研究者のグループ分け>

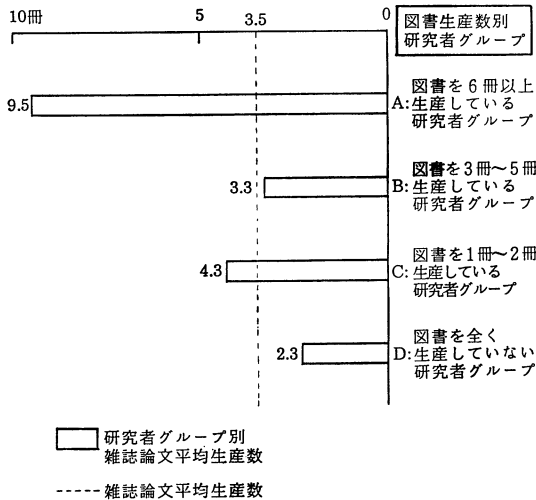
- E—雑誌論文を10件以上生産している研究者(12人)
- F—雑誌論文を4～9件生産している研究者(56人)
- G—雑誌論文を1～3件生産している研究者(92人)

H—全く雑誌論文を生産していない研究者(37人)

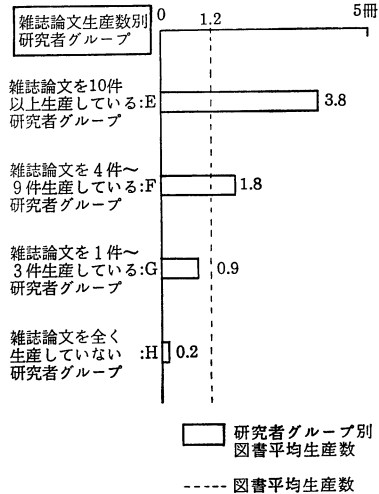
第6-1図は、図書の生産数で研究者を4グループに分け、各グループの研究者における雑誌論文平均生産数をみたものである。図書を6件以上生産しているという図書生産性の高い研究者のグループAは、平均9.5件と全体の平均論文生産数の三倍近くの雑誌論文を生産している。グループBとCも、全く図書を生産していない研究者グループDと比べると雑誌論文の生産性は高くなっている。

第6-2図では、雑誌論文数によって研究者を4グループに分け、各グループごとの平均図書生産数をみたものである。雑誌論文を10件以上生産している研究者グループEは、平均3.8冊と平均以上の図書を生産していた。しかし、図書の生産数によって研究者をグループに分けた時、生産性が非常に高いとみなしたAグループは図書を6件以上生産していたのに比べると、それほど高い値ではない。雑誌論文をかなり生産していたFグループも全体の平均以上ではあるが、それほど図書を生産していたわけではない。雑誌論文を平均以下しか生産していないGグループと全く雑誌論文を生産していない研究者グループHは両方ともほとんど図書を生産していない。

以上のように、図書の生産数が非常に高い研究者グループは、雑誌論文の生産も飛び抜けて高かった。それに対して、雑誌論文を多数生産している研究者グループは、図書を平均以上は生産していたが、図書の生産数の



第6-1図 図書生産数と雑誌論文平均生産数との関連



第6-2図 雑誌論文生産数と図書平均生産数との関連



値としてはそれほどでもなかった。一方図書あるいは雑誌論文を全く生産していない研究者グループは、それぞれ雑誌論文あるいは図書を生産している件数も非常に少なかった。

3. 図書の生産数および雑誌論文の生産数に及ぼす各変数の影響の大きさ

今までは、国文学研究者の生産性と研究者の属性や発表メディアが、それぞれ別個にどのように関連しているかについてみてきたが、ここではそれら変数を個別にみるのではなく、今回取り上げた変数全体で一つのモデルを考えた場合、図書の生産数の変化および雑誌論文の生産数の変化をどの程度説明できるのか、またその時、どの変数が最も強い影響を及ぼしているのかをみていく。特に、図書の場合と雑誌論文の場合で別個にみることで、それぞれの生産性を説明する変数の影響の仕方がどのように異なるのかに注目したい。

ここでは研究者の図書もしくは雑誌論文の生産数の変化（高低）がどのような変数によってどの程度説明できるのかをみたいわけであるが、今回取り上げた研究者の属性は全てカテゴリ変数である。つまり説明したいと考える変数は数値変数で、説明する方の変数がカテゴリ変数であるので、カテゴリ変数をも扱うことのできる統計的手法として林の数量化理論I類による分析を行なった。

図書の生産に関しては、各研究者の図書の生産数を外的基準とし、研究者の属性に関する5つの変数（年令、出身校、学位、所属機関、地位）および分担執筆の度合、雑誌論文生産の傾向の合計7変数を説明変数とした。研究者の属性に関する5つの変数に関しては、これまでの研究者のグループ分けと同じである。また分担執筆の度合としては、先にみた平均分担執筆者数によって、各研究者を以下の5グループに分けた。

- A：図書一冊あたりの平均分担執筆者数 1-8 の研究者
- B：図書一冊あたりの平均分担執筆者数 9-14 の研究者
- C：図書一冊あたりの平均分担執筆者数 15-20 の研究者
- D：図書一冊あたりの平均分担執筆者数 21以上の研究者
- E：図書を全く生産していない研究者

また雑誌論文生産の傾向とは、雑誌論文の生産数の高低による研究者のグループ分けであり、分け方は先に示した4グループと同じである。

雑誌論文の場合には、各研究者の雑誌論文生産数を外

的基準に、研究者の属性に関する5変数と図書生産の傾向の合計6変数を説明変数としている。図書生産の傾向は、図書生産数の高低による研究者のグループ分けで、分け方はやはり先に示した4グループと同じである。

a. 図書の生産の場合

図書の生産数を外的基準にした場合の重相関係数、寄与率、各変数の偏相関係数を第1表に示す。

図書の場合、7つの変数のうち最も生産性への影響が大きいのは分担執筆の度合という変数で、これだけで0.66と非常に強い影響があることを示している。つぎに強い影響があるのは所属機関で0.32であった。他の要因はいずれもそれほど大きな影響を及ぼしているとはいえず、特に地位はほとんど影響していないといえる。この7変数で図書の生産性を説明できる割合は59%であった。

第1表 生産性に対する各変数の偏相関係数と全体の重相関係数（図書の場合）

要 因	偏相関係数
年 令	0.17
出 身 校	0.20
学 位	0.24
所 属 機 関	0.32
地 位	0.04
分 担 執 筆 の 度 合	0.66
雑 誌 論 文 生 産 傾 向	0.22
重 相 関 係 数	0.77
累 積 寄 与 率	59.3%

第2表 生産性に対する各変数の偏相関係数と全体の重相関係数（雑誌論文の場合）

要 因	偏相関係数
年 令	0.24
出 身 校	0.18
学 位	0.15
所 属 機 関	0.34
地 位	0.16
図 書 の 生 産 傾 向	0.38
重 相 関 係 数	0.62
累 積 寄 与 率	38.4%

た。

b. 雑誌論文の生産の場合

雑誌論文の生産数を外的基準とした場合の重相関係数、寄与率、各変数の偏相関係数を第2表に示す。

雑誌論文の場合には図書の場合と異なり、この6変数で生産性を説明できる割合は、39%とあまり高い値ではない。また、6変数のうちどれか一つの変数が飛び抜けて強い影響を示しているわけではないが、その中で影響の大きいのは、図書の生産傾向の0.38と所属機関の0.34であった。

III. 国文学研究者の生産性と発表メディア

A. 国文学研究者の生産性にみられる特徴

国文学研究者に関する調査結果をまとめると、以下の点が明らかになった。

(1) 国文学研究者の発表にみられる基本的特徴としては、図書と雑誌論文が中心的メディアとして利用され、著作が大部分を占め、図書においては人数による分担執筆が多くなされていたことがあげられる。

(2) 図書の出版社と雑誌論文の掲載誌をみると、図書は半分以上「その他の一般出版社」から刊行されており、「国文学専門出版社」と「大手出版社」からそれぞれ2割ずつ刊行されていた。この傾向は、研究者の年齢、所属機関などの属性が異なっても同じであった。雑誌論文の掲載誌の場合、全体としては紀要が半分以上を占めていたが、東大出身者と大学院のある国立大学所属者の場合のみ、紀要の占める割合は2割ほどで、6割以上が「国文学専門一般商業誌」に占められていた。

(3) 生産性の高い研究者のグループは、図書と雑誌論文とでそれぞれつぎのようであった。

- 図 書：年令60才代の研究者  
 東大出身者  
 博士号取得者  
 大学院のある国立大学所属者  
 教授の地位にある研究者  
 一冊あたりの平均分担執筆数数が21人の研究者  
 雑誌論文を10件以上生産していた研究者
- 雑誌論文：年令40才代の研究者  
 東大もしくは早稲田・國學院出身者  
 博士号取得者  
 大学院のある国立大学所属者  
 助教授の地位にある研究者

図書を6件以上生産していた研究者

(4) 図書の生産数の変動は今回取り上げた7変数で60%弱説明でき、分担執筆の度合という要因が0.66と非常に強い影響を及ぼしていた。雑誌論文の生産の場合には、6変数で40%弱説明できたが、非常に強い影響を及ぼす変数はなく、その中では図書の生産傾向と所属機関の影響が強かった。

B. 国文学研究者の生産性と発表メディア

以上の結果を踏まえて、ここでは国文学研究者の生産性と発表メディアの関係について考えてみたい。今回は研究者の生産性と発表メディアの関連を以下の三つの観点から捉えることを試みた。つまり、

- (1) 図書と雑誌論文という発表メディアの違いによって、生産性を説明する変数が異なるのか
- (2) 図書を多く生産する研究者は、雑誌論文も多く生産しているのか、それとも、図書を多く生産している研究者ほど雑誌論文は少ししか生産していないのか
- (3) 図書の出版社や雑誌論文の掲載誌が研究者の属性によって異なるのではないかと、そしてそのことが研究者の生産数とも関連しているのではないかと、という三点である。このうち一番目の観点に関しては、今回の調査では、図書と雑誌論文とでは生産性に影響を及ぼす変数が全く異なるという結果を得た。また二番目と三番目の観点に関しては、図書と雑誌論文とは異なる結果となった。そこで、ここでは図書と雑誌論文という発表メディア別に、その生産の過程を考察していき、その中で発表メディアの二番目、三番目の観点についても併せて考えていきたい。

図書の生産の場合、今回取り上げた7変数で図書の生産の変動の60%弱を説明でき、その中でも図書一冊あたりの分担執筆の度合という変数が非常に多くの部分を説明していた。この図書一冊あたりの分担執筆の度合という変数がなぜこれほど生産性を説明できるのかについて考えてみたい。国文学研究分野で図書が刊行されるという場合、一人の研究者の長年にわたる研究成果が集大成したものであるという見方がよくされている。それは一人の研究者が一生を費やしてこそはじめて図書一冊という大部なものが書けるのだと考えられていたからと言えよう。しかし、今回の調査結果からも明らかのように分担執筆という形で図書が多く生産されており、しかもそれらは二、三人の共著というよりも20人前後という人数による分担執筆が数多くあった。それらの中味をみて

いくと、図書自体のテーマはかなり大きなものであるのに対して、一人の著者が分担しているのはサブテーマやある観点に絞った部分のみであった。たとえば源氏物語の場合でみれば、「夕顔の研究」というよりも「源氏物語の研究」といった大きなテーマで図書がだされ、その一部分として夕顔についての論述がなされるという場合が多いと考えられる。そのような状況を考え合わせると、図書の生産数が多いという研究者は、このような分担執筆で作られる図書に数多く関わることができる人ということになる。そして、この分担執筆にある数以上関わっているということは、その研究者の一冊あたりの平均分担執筆数もやはり多くなるだろう。その結果として、一冊あたりの分担執筆数という変数が図書の生産をもっともよく説明しているということになったと考えられる。

雑誌論文を多く生産しているかどうかという傾向は、図書の生産をあまり説明してはいなかった。また研究者の属性（年齢や所属機関など）が異なることによって、刊行される図書の出版社の種類に特に違いはみられなかった。

これに対して雑誌論文の生産の場合、今回取り上げた6変数で説明できる割合は40%弱とあまり高いとはいえなかった。しかし、その中では図書生産の傾向と所属機関という変数が説明できる割合が大きかった。

なぜ図書を多く生産している研究者が雑誌論文も多く生産しているかであるが、今回調査したほとんどの研究者が雑誌論文を生産していたのに対し、図書を生産していた研究者は全体の半数にも満たなかった。それだけに図書を生産できる（図書の生産に関わることができる）ような研究者というのは、雑誌論文をも多数生産できるだけの様々な環境に恵まれていると考えられる。

所属機関に関しては、大学院のある国立大学に所属している研究者が全体の平均生産数の二倍以上を生産している。これは大学院のある国立大学が研究者にとって生産しやすい環境を提供しているとみることもできるかもしれないが、国文学研究を進めていく上で大学院のある国立大学であるからといって特に有利になる環境というのは考え難い。むしろそのような大学に所属しているという知名度や研究者同士の繋がりなどから、発表する機会に恵まれて生産性が高いと考えられまいだろうか。一例ではあるが雑誌論文の掲載誌を所属別にみた場合、他の機関の所属者がその論文の半分以上を「紀要」を通して発表しているのに対して、大学院のある国立大学所属

者だけが雑誌論文の6割を「国文学専門の一般商業誌」を通して生産していた。つまり国文学研究分野の場合、多くの研究者にとっては「紀要」が発表の中心的なメディアであるが、この大学院のある国立大学に所属している研究者の場合は「国文学専門の一般商業誌」に発表する機会が非常に多いといえる。これは「国文学専門の一般商業誌」が学会誌のように研究者からの投稿、レフェリーによる採否の決定というシステムを採っていないことも関係していると考えられる。この点については国文学研究分野の雑誌に関して、その発行に携わる編集側、出版社側、研究者側からのより詳細な調査研究が必要とされるだろう。しかし少なくともこのような雑誌論文の発表のシステムが、研究者の生産性に影響していると考えられることはできるだろう。

以上図書と雑誌論文の場合に分けて、その生産過程を考えてみた。最後に発表メディアと生産性との関連についてまとめるなら、まず第一に図書と雑誌論文という発表メディアの種類によって、その生産に影響する変数は全く異なっていた。このような図書と雑誌論文を単に論文が1なら図書は10というような重みづけをしただけで、一緒にしてしまうのは問題ではないかと考える。

また図書と雑誌論文という違いだけでなく、それぞれが公表されるシステムも生産性に影響している可能性がある。今回の図書の出版社に関する分析では、生産性に影響するという結果は得られなかったが、国文学研究分野の図書の性格、特徴というものが図書の生産に影響していると考えられる結果を得た。今回は研究者の生産性という観点から図書の生産過程の一端を捉えようとしたが、今後は図書ができるまでの過程における、研究者と出版社側との関係や、研究者同士の結びつきなどがどのように影響しているかについて調査していく必要があろう。また雑誌論文の生産に関しては、国文学研究分野の発表メディアとしての雑誌、たとえば「紀要」や「商業誌」といった雑誌の種類がその生産性に影響しているという結果を得た。しかし「紀要」や「商業誌」において投稿とレフェリーという制度がどの程度あるのか、依頼原稿はどのような形でなされるのかといった点が国文学研究分野はもちろんのこと、日本の人文・社会科学分野のほとんどにおいて明らかにされていない。今後は、このような発表メディアそのもののより具体的で、詳細な研究が必要と考える。このような点が判明すれば、研究者の生産過程全体の構造もより明らかなものとなると考える。

国文学研究者の生産性と発表メディア

- 1) 倉田敬子. 日本における政治学者の生産性. *Library and Information Science*. No. 22, p. 129-142 (1984).
- 2) 真弓育子. 国文学研究における発表メディアの特徴. *Library and Information Science*. No. 23, p. 165-178 (1985).
- 3) Crane, D. Scientists at major and minor universities: a study of productivity and recognition. *American Sociological Review*. Vol. 30, No. 3, p. 699-714 (1965).
- 4) 新堀通也編著. 学者の世界. 東京, 福村出版, 1981, 233 p.
- 5) Wanner, R. A. et. al. Research productivity in Academia: a comparative study of the sciences, social sciences and humanities. ERIC, 1980, HE 013 404 ED 197 640, 38 p.